

第19回「学ぶ土台づくり」推進連絡会議 意見交換内容（委員発言要旨）

日時：令和3年8月25日（水）
午前10時から午前11時まで
Web開催

意見交換 「子育ての悩みに対する援助について」（委員発言要旨）

<佐藤哲也委員>

- 保護者が「子育てで悩んでいること」の1位は、子供の年齢別に見ても、「子供のしつけ・マナーなどの身に付け方」であった。「子供のしつけ・マナーなどの身に付け方」は、家庭というプライベートな領域で実践されているので、方針なども様々である。そのため、行政が家庭に対して「こうすべきだ」「こうしなさい」と言うことで公的機関が私生活を管理統制することに陥ることを危惧している。
- 行政としてできることは、子育て実践の参考例などの情報を発信することや子育て講演会などの学びの機会を提供することであると考えられる。保護者へのアプローチとしては、幼児教育センターの取組の活用を促していくしかないと感じた。

<小林慶子委員>

- 昨年度、教育委員会主催の「栗原圏域親の学び研修会」を自園（栗原市立瀬峰幼稚園）で開催していただいた中で、「親育て」というテーマでの講話は参加者から大変好評だった。
- 今年度もこのような研修会を開催できればよかったが、コロナ禍で開催できなかったため、県から研修資料を提供するなどの情報発信をしていただきたい。

<中鉢義徳委員>

- 宮城県保育協議会として、保育者や保護者に対して、保育所（園）や認定こども園などにおける学びの特性である「五感を通じた体験」の大切さの理解を促すことに注力している。遊びを通して総合的に学ぶことの大切さは、「学ぶ土台づくり」の取組においても呼び掛けられており、この大切さの理解促進に向けても取り組んでいる。
- 子供の体験活動の幅を広げるためには、様々な環境設定が必要であるとともに、家庭や地域、保育施設の連携も重要であると感じている。
- 富谷市教育委員会では、家庭や地域、学校をつなぐ実行委員会を置いて十数年以上経つが、家庭の教育力が低下している現状も踏まえ、様々なコーディネーターの方にも協力をいただいて活動している。このような取組を幼児教育施設にも広げていくことを提案したい。

<庄司昭博委員>

- 園児の保護者同士の主なコミュニケーションはPTA活動だったが、コロナ禍のために、このような活動機会がなくなったことは非常に大きな出来事だったと感じている。
- 自園（ねのしろいし幼稚園）では、LINEやSkypeを活用して動画を配信するなどの情報発信をしている。このような情報発信は一方向の発信であるため、保護者が「今どのように感じているのか」「今どのような思いをもっているのか」は見えないということが現状であると捉えている。
- 宮城県私立幼稚園連合会としては、加盟している幼稚園においても様々な取組を行っているため、情報を集約していきたい。
- 個人の意見として、保護者に対して正確な情報を提供する方法に課題があると感じており、情報を得る方法があるものの、保護者自身で情報の正確さを判断しにくいのではないかと考えている。

る。一方向の情報発信であっても、様々な情報が正確に提供される県のポータルサイトがあることによって、保護者の安心材料になるのではないかと考えている。

<工藤俊平委員>

- 子育ての悩みを近い人に相談している保護者の割合が高い一方で、「近所の人」の回答から割合が極端に低いことが気にかかった。
- 認定こども園や保育所、幼稚園などは、「子育て支援」を機能として担っているものの、実態として、有効活用されていないことを日々感じている。
- 認定こども園として、例えば、自園（泉第2チェリーこども園）では、地域の子育て力の向上を図っていくため、「子育てに理解のある個人や企業、地域の人々」を参加条件として、お祭りを開催している。参加者が非常に多く、「子育てに興味のある方がこんなにたくさんいるんだ」と感じる事ができた活動だったが、コロナ禍で昨年度から開催できていない。
- 参加者からは、「子育て支援をしていきたい」「地域で活躍していきたい」と考えているものの、市民センターや民間の広場・施設を利用するための「料金の高さ」や「条件の細かさ」が影響して、なかなか活用できていないという声を聞く。自園では利用料金や利用条件を非常に低く設定し、広く活用していただけるよう開放しているため、利用者は非常に多いものの、自園の近隣を活動範囲とすることが精一杯な現状である。
- そのため、子育て支援への思いや力をもつ地域の方や民間の方と、県や仙台市などの行政と協力しながら、地域や市町村、県などの広い範囲で子育て力を高めていくことができる事業などが展開されていけばよいと考えている。

<齋藤勇介委員>

- 子育ての悩みについて相談する人が「誰もいない」という回答があったことに関しては、コロナ禍で学校行事などの保護者同士の出会いの場が減少したこともあり、孤立している保護者がますます増加したのではないかと感じている。
- 私が主に活動している名取市では、これまでの子育て広場などの保護者と地域の方をつなぐ場づくりを大切にしながらも、屋内の出会いの場ではない、戸外のプレーパークでの自然体験活動が進んでいる。
- このように、新型コロナウイルス感染症感染のリスクを軽減しつつ、保護者たちが子供たちの遊ぶ姿を見ながら、保護者同士で悩みを共有できる戸外の「場」が地域の中につくられ始めている。コロナ禍においては、場づくりの視点を変化させていく必要がある。
- また、子育ての悩みに対する援助として、子育て講演会などの学びの機会の提供や情報提供が非常に重要であると考えている。
- コロナ禍でオンラインを活用した取組が進んだことから、家庭や教育現場に届く形で情報が発信されながら、共に学び合う仕組みづくりができればよいと思っている。
- 宮城県児童館・放課後児童クラブ連絡協議会が運営主体となり、「全国児童館・児童クラブみやぎ大会」をオンラインで開催する予定である。開催方法を工夫すれば、1,000人規模であっても学びの機会の提供が可能となることに加えて、グループディスカッションなどを通して、近しい人や保護者同士では相談できない悩みを離れた地域の方と共有しながら意見交換できる場になると考えている。このことから、今後も新たな視点を取り入れていく必要があると感じている。

<遠藤愛弓委員>

- 本会議には、「家庭」の立場から参加しており、子供たちのことを真剣に考えていただいていることに感謝の気持ちでいっぱいである。
- 保護者の中には、親になるための教育を受ける機会があまりなかったために、なにが正解なの

かがわからず、不安な気持ちをもつ親もいるのではないかと思っている。積極的に情報収集する親も多い一方で、日々の生活や仕事に追われ、家庭教育の場や時間を取ることが難しく、「子供は幼稚園や保育所に行って見ってもらうもの」と考えている親もいるのではないかと思っている。

- 子供は、家庭だけではなく、地域や社会における未来の宝であることから、「みんなで育てていこう」と幼稚園や県から呼び掛けていただきたい。このようなことが親の安心や子育てに対する自信につながっていくと感じている。「子供は未来の宝」であることの理解を親に促す場があればよいと考えている。
- これまでは子育ての悩みを保護者同士で相談し合う場もあったが、コロナ禍で保護者同士が集う機会や人と会う機会などもなくなった。このような現状が孤立を深めてしまう可能性もあるため、親を励ます場があればよいと感じた。

<弓田宣弘委員>

- 3点発言させていただく。
- 1点目は、情報発信の機会として、乳幼児健康診査・就学時健康診断を活用してはどうかと感じたことである。乳幼児健康診査・就学時健康診断は全ての乳幼児が対象となるため、「学ぶ土台づくり」や子育てに関する情報を全ての保護者に対して提供することができる重要な機会であると考えている。このような機会を捉えて、例えば、「子育て便利帳」など、いつでも目にする事ができ、部屋の壁に貼ることができるものを配布することを提案したい。
- 2点目は、ポータルサイトの利便性の向上を図ってはどうかと感じたことである。
- 子育て世代の多くは、スマートフォンを使用して情報を得ている。
- 私自身もスマートフォンを使用して検索を試みたものの、県のホームページは情報が網羅的であるため、知りたい情報があるページまでたどり着くことができなかった。
- 子育ての悩みに対する援助として、「子育てで悩んでいること」の上位項目に対するワンポイントアドバイスなど、子育てに関する情報を提供する「子育てポータルサイト」があればよいと感じた。
- また、検索しやすくする工夫も重要であるため、「子供の年齢」や「相談内容」、「居住する地域」などを選択すると、選択した内容に応じて行政の相談窓口の情報が提供されるなどの工夫があればよいと感じた。
- さらに、地域の子育て講演会やイベントなどの開催情報が集約されていればよいと感じた。
- 3点目は、保護者の意見や要望を集める工夫が必要だと感じたことである。アンケートの「その他」に記入された内容がとても参考になったため、意見や要望を集めることを目的とした欄を設けるのもよいと感じた。
- また、オンラインを活用したフォーラムなど、保護者の声を直接聞く機会を検討してもよいのではないかと考えている。

<波多野ゆか委員>

- 佐藤哲也委員の発言にあった「学びの機会」や、小林慶子委員の発言にあった「栗原圏域親の学び研修会」に関わることとして、家庭教育支援チームでは、「宮城県版親の学びのプログラム『親のみちしるべ』～十人十色の子育て&親育ち～」を活用しながら、研修会を圏域別（3か所程度）に開催している。「親と子のコミュニケーション」などをテーマとしたグループワークはコロナ禍のために実施できないものの、人数を制限しながらこの研修会を継続している。
- この研修会も、「まん延防止等重点措置」や「緊急事態宣言」が発出されれば開催できないが、他の委員の発言にもあったように、子育てに「休み」や「悩みがない日」はないため、身近な相談できる存在として、家庭教育支援チームの活動を通して、地域力を高めていきたいと強く感じている。

- 一方で、復興予算を財源として活動している中で、コロナ禍で活動が縮小していけば実績もなくなるため、今後の活動に影響するのではないかと懸念している。
- 子育て家庭の悩みが少しずつでも減っていくように、「県民みんなで子育てを応援しよう」という強い発信力のもと、家庭教育支援チームの英知を集めていきたい。
- 保護者自身が親になるための教育を受けておらず、親から子育てされたように子供に対して子育てをしてしまうことで、言葉による暴力などの様々な問題につながる可能性があると考えている。
- 弓田宣弘委員の発言にあった「子育てポータルサイト」による情報発信でも、現役の「パパ」「ママ」だけではなく、現役の「おじいちゃん」「おばあちゃん」も情報を得ることができるような工夫があればよいと感じた。

<石垣政裕委員>

- 早寝・早起き・朝ごはん実行委員会は、「ルルブル」を推進する立場にあり、子供と大人と一緒に朝清掃をするなど、子供が大人と社会的に接触しながら「早寝・早起き・朝ごはん」などの規則正しいリズムを身に付けていくことに取り組んでいる。コロナ禍で機会を捉えることも難しい状況ではあるが、講演会などを通して「早寝・早起き・朝ごはん」を啓発していきたいと考えている。
- また、当会は、子供会やスポーツ団体、企業、行政などで構成されている団体であるため、様々な立場の特徴を生かした活動を今後も進めていきたいと考えている。
- 「親子のかかわり」として、子供と触れ合う時間が「ほとんどない」「30分未満」と回答した父親の割合が5.5%だったことは気にかかった。父親の子供と触れ合う時間が非常に少なかったことから、父親が子供と十分に触れ合えていないことを現状として捉えた。
- 子供と触れ合う時間の増加に向けて、この現状を改善していくためには、企業の協力が必要であることから、県などの行政と協力して取り組んでいきたい。
- また、当会にはスポーツ団体も加盟しているため、団体を通じて、子供たちの基本的な生活習慣の改善に向けた活動を進めていきたい。

<塚原俊也委員>

- 本会議には、「豊かな体験による学びの促進」の立場から参加している。
- 「子育てで悩んでいること」の1位から7位までの悩みは、8位にある「子供の体験活動の不足」の解消によって改善されていく悩みが多いと感じており、体験活動の場を広げていく工夫が重要であると考えている。
- くりこま高原自然学校は、「非日常」の体験活動を提供することが多い。幼稚園や保育所、児童館などの「日常」の場における様々な体験活動に向けた取組が、保護者との連携によって広がってほしいと思っている。
- 子育てに関する情報を「幼稚園・保育所など」「友人・子育て仲間」「SNS」から得ている保護者の割合が高かった。このことから、まず、「SNS」を入口として情報を取得し、次に、その情報を「幼稚園・保育所など」で共有することにより「あ！正しいんだな」と情報の正確性を判断することで、「子育て仲間」と「実践してみよう！」という、三者の関係づくりができればよいと思っている。
- 私自身の子育てを通して、日常の近い人との体験活動の場が増えることにより、「学ぶ土台づくり」が深まっていくと感じている。
- 昨年度、当校の仲間と共に、家庭で簡単にできる遊びを紹介する動画（5分程度）をつないでいく「遊びのバトン」というチャンネルをYouTubeに作成した。「家庭」や「地域の里山・田んぼ」でできる体験を紹介する動画を県として作成し発信していくことを提案したい。

- また、体験活動の場が広がりつつあるため、指導者の関わり方が重要だと考えている。同じ体験活動をとっても、指導者の価値観や視点によって、「競争的になった」「平和的になった」「手を出し過ぎた」「しっかり見守ることができた」などの様々な体験活動になるため、当校のような民間の団体と連携するなどして、指導者に対するオンライン研修や実地研修をしていただきたいと考えている。このメンバーであれば、素晴らしい動画が作成できると思っているので、事業として予算化し、依頼していただきたいと考えている。

<伊勢みゆき委員>

- 工藤俊平委員や齋藤勇介委員の発言には、共感する部分が多かった。その上で、3点発言させていただく。
- 1点目は、保護者に寄り添ったサポートができればよいと感じたことである。保護者の多くは平成生まれであり、様々な感覚をもつ保護者が増えたと思っている。このことから、子供を第一に考えつつ、保護者目線を重視していただきたい。意欲がある保護者や意識の高い保護者は、オンラインでの学びや打合せを朝早い時間や隙間時間を活用しているため、時間帯を保護者に合わせる工夫も必要だと感じている。
- 2点目は、塚原俊也委員の発言にあった「関わり方」のことである。県として、「小学生・中学生の不登校」に課題があることから、「学ぶ土台づくり」による「就学前の子供」と「保護者や周囲の大人」の関わり方が非常に重要であると考えている。子供との関わり方を知らない大人が多いことを現状として捉えており、大人が「どのような場面でどのような言葉を使うか」「どのような意識で子供に関わるか」ということを学ぶとともに、子供の思いを一度受けとめることができる寛容な心をもつ大人が増えていけばよいと思っている。
- 3点目は、中鉢義徳委員の発言にもあったように、小学校・中学校・高等学校における地域学校協働活動などの「地域全体で子供を育てる」仕組みづくりが幼稚園や保育所にも広がり、斜めの関係の大人たちが子供と関わるができる仕組みづくりを行政から促していただきたいと感じたことである。波多野ゆか委員の発言にもあったように、関わる大人の多くがボランティアであることや、活動するための財源の縮小により、小学校や中学校においてもこれまでのような取組が難しくなってきているため、県全体で取り組んでいく必要があると思っている。

<須藤宣毅委員>

- 東日本大震災の取材をした中で、「子供のしつけ・マナーなどの身に付け方」や「子供の基本的生活習慣の身に付け方」、「子供の友人関係」などの子育ての悩みに関わるものとして、異年齢保育をしていた茨城県水戸市内のある保育園でのエピソードがある。水戸市においても大きな揺れに襲われた東日本大震災時、保育者が園庭への避難指示を出した際に、年長児が年少児に靴を履かせて園庭に連れ、園児たちは泣くことなく速やかに避難できたそうだ。避難のために異年齢保育をしてきたわけではないものの、普段から年長児が年少児の世話をすることで信頼関係ができていたことは非常時にも役立ったようであり、これは平時の様々な生活シーンに応用できるのではないかと感じた。
- 既に異年齢保育をしている幼児教育施設もあると思われるが、異年齢交流を意識した取組が地域社会や行政の取組にも更に広がればよいと感じた。
- 一人っ子世帯が多い現在、「世話をされる」ことで「世話をする」ことを学ぶのではないかと感じている。
- また、子育ての悩みについて相談する人が「誰もいない」と回答した割合が2.2%（令和3年度）と3.0%（令和2年度）だったことは、予想を下回っていた。アンケートに回答していない保護者の中には、相談する人が「誰もいない」保護者が相当いるのではないかと感じている。
- これまでも教育現場や行政から様々な情報発信がされている中で、子育て交流の場を活用して

情報を得る機会や交流機会がある保護者がいる一方で、交流の場を活用することにためらいを覚える保護者もあり、電話で相談することに対してハードルが高いと感じているのではないかと思っている。例えば、Yahoo!知恵袋などのように、保護者がパソコンで気軽に相談でき、その相談に対して専門家が答えるなどのコミュニケーションも必要ではないかと感じた。さらに言えば、このコミュニケーションを入口として、そこから更に交流の場や交流機会を提案していく方法もよいと思っている。

<川島隆太座長>

- 様々な意見が出されたため、次年度以降の県の取組の検討に活用していただきたい。
- 大きく分類すると、まず、県が主体となり、多岐にわたる情報を新たな手法で正確に発信するために、コロナ禍や子育て世代の状況を踏まえつつ、子育てに関する事業の情報を集約し、情報の多様性を高める工夫が必要だという意見が出された。
- また、一方向で情報発信するとともに、丁寧に子育て世代の声を聞く方法を検討していく必要があるという意見も出された。情報発信の方法としてウェブサイトなどの活用が多い中でも、「目安箱」のように匿名で子育て世代の声を聞く仕掛けづくりにも取り組んでほしい。
- さらに、重要なキーワードとして「指導者の教育」が出されており、アフターコロナやウィズコロナの時代を目指して、積極的に「自然体験」や「戸外での体験」ができる場を運営していく必要があるという意見も出された。今後、「子育て支援に関わる方」の学びの場づくりや、「これから親になる方」「親になっている方」の学びの場づくりにも取り組んでほしい。
- 宮城県の子供たちを明るく大きく伸ばすために、本会議で共有した意見を踏まえ、それぞれの団体と県がしっかりと連携して進めていければと願っている。

<宮城県教育庁義務教育課>

- 皆様から多数の貴重な御意見をいただき感謝申し上げます。本日いただいた御意見等を、県の関係部署と共有するとともに、今後の県の取組につなげていきたい。